

●第四卷
近世

日本文芸史

原道生・林達也 編

表現の流れ

学院図書館
書章

企画委員
古橋信孝
藤井貞和
林達也
山田有策
鈴木貞美
宮腰賢

日本文芸史——表現の流れ

第四卷・近世

原道生・林達也編

初版印刷 一九八八年四月一五日
初版発行 一九八八年四月三〇日

河出書房新社

発行人 清水 勝

東京都渋谷区千駄ヶ谷二一三二一
電話 (〇三) 四〇四一八六一 (編集)
(〇三) 四〇四一二〇一 (営業)
振替東京〇一一〇八〇二

印刷 凸版印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社

装幀 戸田ツトム
編集協力 朝比奈秀一

落丁・乱丁本はおとりかえします
定価は函・帯に表示してあります

Printed in Japan © 1988
ISBN4-309-60924-4

『日本文芸史——表現の流れ』 はじめに

ことばの生命を復権するために

本シリーズは、『古事記』『万葉集』以前から現代にいたる日本の文芸作品に関心をもつ、すべての人びとのために企画された。

文芸作品を読むとき、われわれはそれを生み出した人びとが見、感じ、考えた世界を生きる。作品を読むことによって、時代や文化を異にする他者の生を共有し、心の経験を大きく拡げることができる。

本シリーズは、読者にそのための手がかりを提供するために編まれている。

世界的規模での文明の行きづまり、精神の危機の進行が論じられる今日、われわれの現在立っているところを明らかにし、未来を切り拓くために、文化的精神的遺産の総体としての見直しが必要だが、火急の課題である。あらゆるものが情報化され、知識の断片と化するような世界は、貧血症的な世界にすぎないだろう。世界を生氣にみちたものとして取り返すために、とりわけことばの生命を復権させるために、文芸作品の息吹きをわれわれのものとするのが不可欠である。遺産は過去のものではない。われわれの前に、われわれのために等しい価値をもって現存しているのだ。

われわれが日本の文芸作品の歴史の見直しを企画し、より多くの人びとに親しみやすい形で出版しようとした根本的な目的はここにある。

文芸作品独自の生きた姿を総体として明らかにする

われわれにとって文芸の歴史とは、作品の歴史にほかならない。それは作品をめぐる歴史的事実の集積でも、作品を支えた思想の変遷でもない。ことばによって語られ、書かれ、聞かれ、読まれ、慈しまれてきた、まさに生きた作品の歴史にほかならない。

文芸作品を、その生きた姿においてとらえなおすこと、それが生まれ、受容された、そのままの姿に限りなく

近づこうと試みることに、これが文芸の歴史にアプローチするわれわれの基本的立場である。

この立場は、人間のことばによる活動の場において作品をとらえ、ことばの芸として考察する方法に立つことを導く。その意味でわれわれは本シリーズを『日本文芸史』と名づけた。

表現の形質を洗いなおし、流れをとらえる

われわれは作品をめぐる歴史的事実の集積や文芸思潮の変遷を追うことに終始する既成の「文学史」から訣別するとともに、作風の変化を社会の歴史の変遷から説明しようとする「文学史」の方法とも訣別する。

たしかに文芸は、社会のなかに生まれ、社会のなかに息づき、社会を反映する。が、文芸の流れは、社会の変化に還元することはできない。

表現は前の時代の様式を規範として負い、それを受けつぎ、更新し、あるいは革新して生み出される。表現の流れは、社会の歴史につきうごかされつつも、それから相対的に独立した軌跡を描くものである。

われわれは、それぞれの作品を生きた姿においてとらえるという立場から読み直し、表現の流れのなかに位置づけ直すことをもって、総体としての文芸作品の流れの記述を行った。副題に「表現の流れ」と付したゆえんである。

企画編集委員 鈴木貞美

目次

はじめに

鈴木貞美

序説

この巻のためのノート

林 達也

12

林 達也

16

第一部 近世文芸の源流

概論

林 達也

17

第一章 武士と文芸

第一節 戦国武将の文芸と学問

林 達也

21

I 天下一統と文芸・学問

22

II 家康の治世と学芸の行方

24

第二節 文人武士の先駆

林 達也

27

I 細川幽斎——雅と俗

28

II 長嘯子木下勝俊——「雅」への沈潜

29

III 石川丈山——李・杜を求めて

30

第二章 軍記・雑談・戯言

林 達也

31

I 天下人と軍談

32

A 記録と顕賞——牛一と由己 B 伝説創造の方法
——市庵の世界

II 軍談諸相

35

A 地方の軍談 B 実戦者と軍談 C 女性と軍談

III お伽と雑談

39

A お伽と文芸 B 醒睡笑の世界 C きのみはけふ

第三章 仮名草子

IV 戯言

の物語

A 俳諧 B 狂歌

43

第一節 出版と文芸

渡辺守邦

47

I 古典享受の広がり

48

II 当代作品の開版

50

第二節 仮名草子の作者たち

渡辺守邦

51

亜流の先覚者

52

第三節 好色表現の方法

渡辺守邦

53

薄雪物語・恨之介・是楽物語

54

第四節 浮世表現の方法

渡辺守邦

57

I 浮世物語

58

II 竹斎・元の木阿弥

59

第五節 「なをし」の方法

渡辺守邦

61

I 仁勢物語
II 犬枕・尤之双紙

62 63

第六節 雑談の方法

渡辺守邦

65

I 可笑記

66

II 目覚草

67

第七節 実用書の世界

渡辺守邦

69

I 東海道名所記

70

II 露殿物語

71

第八節 異界の文芸

渡辺守邦

73

I 棠陰比事物語・伽婢子

74

II キリシタン物

75

第四章 歌舞伎と人形浄瑠璃

第一節 近世演劇の誕生

阪口弘之

77

I 「かぶく」芸能

78

II 「悪所」としての芝居町

80

第二節 歌舞伎の成立

阪口弘之

81

I 当代風俗の舞台化——女歌舞伎

82

II 諸芸の開発——若衆歌舞伎

83

III 続き狂言への道——野郎歌舞伎

84

第三節 人形浄瑠璃の成立

阪口弘之

87

I 新様式の模索

88

II 新しいヒーローの創造——金平物

90

III 当代性の獲得——播磨掾・加賀掾

92

第二部 規範の定立

概論 原道生

97

第一章 雅・俗の交錯

第一節 古典学の地平

林達也

101

I 契沖以前

102

II 契沖学の展開

103

第二節 和歌伝統の近世的様相

林達也

105

I 堂上歌壇の人びと

106

第三節 西山宗因と談林

林達也

109

I 貞門の行方

110

II 談林の台頭と貞門

111

III 寓言・飛騨・輕口

112

第二章 芭蕉

115

第一節 蕉風俳諧の成立

上野洋三

115

I 談林と芭蕉

116

II 屈折する表現

117

III 七部集の展開

119

A 冬の日の世界 B 猿蓑の世界 C 猿蓑以後

第二節 蕉風の表現と方法

上野洋三

123

I 蕉風俳諧の方法——付合論

124

II 古典と芭蕉

126

III 蕉風俳諧の表現

127

IV 俳諧精神と理念——不易流行の説

128

第三節 紀行と俳文

上野洋三

131

I 紀行文の方法

132

II 俳文の方法

134

第四節 芭蕉以降

上野洋三

137

I 同時代の俳諧師たち

138

II 芭蕉の弟子

139

第三章 西鶴

141

第一節 俳諧と西鶴

矢野公和

141

西鶴の俳諧

142

第二節 好色表現の連続と不連続

矢野公和

143

I 世之介登場

144

II 好色一代男の構想と世界

145

III 好色一代男の文体

147

IV 諸艶大鑑——悪所と好色

150

V 好色五人女——市井の好色

151

VI 好色一代女——好色雑談

152

第三節 致富の夢

矢野公和

153

I 日本永代蔵の意図

154

II 日本永代蔵の世界

155

第四節 雑話の位相

矢野公和

157

I 西鶴諸国はなし

158

II 懷硯・本朝二十不孝

159

第五節 武士の倫理と現実

矢野公和

161

I 武道伝来記

162

II 武家義理物語

163

第六節 浮世・憂世

矢野公和

165

I 世間胸算用の構想と世界

166

II 世間胸算用の文体

168

III 西鶴置土産

169

第七節 西鶴以降

矢野公和

171

I 団水と一風

172

II 其磧と自笑

173

第四章 近松

第一節 歌舞伎の隆盛

原 道生

I 元禄歌舞伎

A 技芸の充実 B 戯曲の整備 C 作者の自立

176 175 175

II 歌舞伎の変貌

第二節 近松の浄瑠璃とその周辺

原 道生

I 当流浄瑠璃の成立

184 183 181

II 時代物と世話物

A 作者近松の誕生 B 義太夫節の創始

III 時代物の展開

A 時代悲劇の成立 B 筑後掾没後

IV 世話物の諸相

A 世話浄瑠璃の成立 B 多彩な展開

V 近松の芸術観

VI 紀海音の浄瑠璃

206 204 198 191 189

第三部 近世表現の可能性

概論 原 道生

211

第一章 文人の系譜

第一節 儒学の展開と変貌

大島英夫

I 反朱子学の立場——古義学の意味

A 朱子学の系譜 B 反朱子学の意味

216 215 215

II 政治と文学——徂徠学とは何か

III 文学への傾斜——南海と南郭

IV 「狂」の思想と文芸——銅脈先生を中心に

第二節 古典研究と和歌

百川敬仁

I 注釈学の行方——契沖学と「実証」

II 国学への道——真淵

A 真淵の生涯 B 真淵の思想

III 古典と文芸——宣長

227 225 224 223 220 219 218

第三節 去俗の精神

長島弘明

I 文人俳諧師の動向

II 芭蕉と蕪村

III 蕪村と時代状況

IV 蕪村の表現と方法

第四節 知のハンラン

武藤元昭

I 平賀源内の世界

A 平賀源内の生涯 B 平賀源内（風来山人）の作品

II 南畝——韜晦の方法

III 天明狂歌の表現と方法

246 245 242 241 238 237 236 234 233 231 230

第二章 近世物語の方向——白話の

受容と秋成

第一節 白話の流行と享受

I 水滸伝

II 三言二拍

第二節 庭鐘と綾足

I 英草紙と繁野話

II 西山物語

第三節 初期秋成

I 諸道聴耳世間猿

II 世間妾形気

第四節 雨月物語

I 雨月物語の構想と世界

II 雨月物語各論

III 秋成の表現意識

第五節 春雨物語

I 春雨物語の構想と世界

II 春雨物語各論

III 秋成と歴史

第六節 秋成と古典学

呵刈葭論争

木越 治

木越 治

木越 治

木越 治

木越 治

木越 治

木越 治

木越 治

木越 治

274 273 271 270 268 267 265 264 262 261 259 258 257 255 254 253 251 250 249 249

第三章 江戸文芸の世界

第一節 黄表紙——「うがち」と「むだ」

I 黄表紙の発生と展開

II 「うがち」と「ちやかし」

III 恋川春町

IV 朋誠堂喜三二

V 山東京伝

第二節 洒落本——遊里をうがつ短編小説

I 初期洒落本の表現——両巴扨言から

II 洒落本の確立——遊子方言・辰巳之園

III 京伝の洒落本——通言総籙

第三節 天明戯作壇の終熄

I 寛政の改革と黄表紙

II 黄表紙から合巻へ

第四節 雑俳・川柳

I 雑俳の流れ

II 川柳点

第四章 人形浄瑠璃最盛期

第一節 竹豊二座の拮抗

I 合作の意味

中山右尚

中山右尚

中山右尚

中山右尚

中山右尚

中山右尚

中山右尚

中山右尚

中山右尚

中山右尚

中山右尚

中山右尚

中山右尚

中山右尚

中山右尚

中山右尚

中山右尚

中山右尚

298 297 297 295 294 293 291 290 289 286 285 284 283 280 279 278 277 276 275 275

Ⅱ 曲風の確立と人形技法の発達

Ⅲ 最盛期の諸作

A 奥州秀衡有誓塔 B 菅原伝授手習鑑と義経千本桜
——浄瑠璃の黄金時代 C 仮名手本忠臣蔵——黄金
時代の終局

301 299

第二節 新作時代の終焉

内山美樹子

I 近松半二

Ⅱ 菅專助

Ⅲ 文楽の時代

314 313 310 309

第五章 歌舞伎の大成

第一節 歌舞伎の興隆

近藤瑞男

I 新手法の創出——並木正三

Ⅱ 江戸狂言の新風——桜田治助

Ⅲ 上方から江戸へ——並木五瓶

第二節 劇場音楽の発達

近藤瑞男

I 多彩な所作事

Ⅱ 長唄と豊後系浄瑠璃

323 322 321 318 317 316 315 315

第四部 伝統の継承と異化

概論 林 達也

325

第一章 知の行方

第一節 江戸の詩壇

揖斐 高

I 江湖詩社——詩の大衆化

Ⅱ 都市風俗と艶情の詩

Ⅲ 流落の抒情詩人——柏木如亭

330 329 329

第二節 京坂・九州の詩壇

揖斐 高

I 菅茶山と広瀬淡窓——田園の詩

Ⅱ 頼山陽——日本外史の世界

第三節 考証随筆の世界

揖斐 高

I 南畝・京伝・種彦

340 339 337 336 335 332 331 330

第四節 経世有用の志

揖斐 高

I 蘭学の大施主——渡辺崋山

Ⅱ 草莽の国学——平田篤胤

Ⅲ 狂愚の行動者——吉田松陰

344 343 343

第五節 無用者の文学

揖斐 高

I 寺門静軒の江戸繁昌記

Ⅱ 遠山雲如と大沼枕山

第二章 日常性とロマネスク

第一節 合巻

武蔵元昭

353 353 351 350 349 346 345 344 343 341

I 雷太郎強悪物語——敵討物の世界

II 柳亭種彦

A 正本製 B 修紫田舎源氏

第二章 滑稽本

I 談義本以降

II 東海道中膝栗毛

III 浮世風呂・浮世床

武藤元昭

359

第三章 人情本

I 明烏後正夢

II 春色梅児誉美

武藤元昭

365

第四章 読本

I 水滸伝翻訳・翻案史

II 忠臣水滸伝

III 曲亭馬琴

徳田 武

369

A 馬琴の世界 B 椿説弓張月 C 南総里見八犬伝
D 馬琴の隠微

372

371

370

第三章 歌俳の現在

I 江戸・京都の歌壇

A 江戸派の動向 B 桂園派の形成

林 達也

381

II 幕末の歌人たち

A 良寛 B 大隈言道 C 橘曙覧 D 述志の和歌

384

III 後期の俳諧

A 小林一茶 B 月並俳諧

387

第四章 爛熟期の歌舞伎

第一節 生世話の方法——鶴屋南北

近藤瑞男

389

I 桜姫東文章

II 東海道四谷怪談

391

第二節 最後の狂言作者——河竹默阿弥

近藤瑞男

393

I 白浪狂言の諸作

II 散切物と活歴物

394

第五章 話芸の系譜

第一節 落語

I 咄の会と咄本

II 烏亭馬馬の世界

III 幕末の落語・講談

延広真治

399

第二節 歌謡

I 遊里と歌謡

II 様ざまな歌謡

III 江戸の小唄

矢野公和

405

408

407

406

402

401

400

399

399

398

394

393

391

390

389

389

日本語の流れ

清水康行

⑮ 二元・対立の時代

⑯ 上方語と江戸語

⑰ 国学者たちの日本語研究

⑱ 武士のことばと女性のことば

410 324 210 96

巻末

主要索引（人名・作品名・事項）

執筆者紹介

日本文芸史 第四卷
近世

序説

近世は表現様式が多様化した時代であった。中世まで第一文芸の位置を占めてきた和歌がなおも、貴族・非貴族を問わず「雅」の文芸の中心にあったことは確かであるが、同時に、連歌を淵源とする俳諧が、武士・町人の間に深く根をおろし、時代の基幹としての文芸に成長していく。狂歌もまた文芸を愛好する人士の間に広く行われ、一定の時代を象徴する表現たりえた。一方、物語・小説の世界も表現の方法について、様ざまに模索し、新たな様式を獲得していく。仮名草子から浮世草子、洒落本、黄表紙等々への展開は、それぞれが隆盛を見た時代の社会状況ときわめて密接な緊張関係のもとになされたものであった。こうした文芸のありようが、出版という、近世になって新しく登場した広範に文化を普及させる技術、および、その出版を受け入れうる社会的基盤が消費経済の浸透によって成立したことを背景としていたことは言うまでもない。つまり、文芸を広げる技術とそれを受け入れる基盤の成立が文芸の社会化、文芸に携わる層の拡大といった現象をもたらし、表現様式の多様化を必然のものとしたと言えよう。

表現の基層ということで見ると、近世は、宗教的世界観から疎外されていく時代であり、時代的制約をうけながらも文芸の作り手の顔がはつきりとしてくる時代であった。中世とのかかわりというと、仏教的、あるいは中世的共同体に根ざす表現は影をひそめていく。たとえば説教節の諸編が近世になって出版されているが、出版という形式をとったとき、すでに説教を支えていたカオス的な世界は切り離されていた。かわって登場してくるのが、各階層にわたる、名前をもった無数の作家たちであった。彼らは、あるいは集団をなし、あるいは個々に、現実ないし日常性、そして何より人間そのものに深く関心をもち、様ざまな視点から時代と切り結び、それぞ

れの表現方法を獲得していった。ここにも表現様式の多様化の根がある。もちろん、彼らの営為は近代的な意味での「オリジナリティ」の概念とは異なった法則で成り立っていた。類同の表現を峻拒する姿勢と、彼我の区別に拘泥しない姿勢とが矛盾なく受け入れられるといった体のものであった。こうした基盤にたつて近世の文芸は、俳諧に、草紙に、演劇に、独特の表現世界を切り開いていく。

表現様式の多様化、文芸に携わる層の拡大、そして、現実への深い関心は相互に絡み合つて近世的表現を実現していくわけだが、こうした状況はまた価値観の多様化をもたらしことになる。思想界において儒教が時代の流れとともにその基本的なありようを変えていったのも現実への対処のしかたと無関係ではなかったし、堂上の和歌と地下の和歌とではおのずから異なった方向へ進んでいく。同時期、同基盤に生きながら、積極的に社会の変動に参入することに価値を見いだす者もいれば、社会の無用者と自己を認識して生きることには価値を見いだす者もいる。このような価値観の多様化は、政治権力が想定するあるべき価値との間にズレを生み、権力の介入といった事態を招くこともあった。

以上、近世文芸の枠組をあらかた見てきたが、本書の各部の構成を以下に示す。

第一部 近世文芸の源流

第一部は天正後期から寛文・延宝期にかけて、一六世紀の末から一七世紀にかけての約一〇〇年間を対象としている。この時期は、中世的な規範と新たな近世的価値観とが交錯した時代であった。政治の上から見ると、織豊政権から江戸幕府の開幕へ、天下一統をめぐる激しい覇権争いから元和偃武へという急速な展開があり、近世の体制の基礎となる諸政策・制度が打ち出されている。経済的にも、流通機構が全国的に整備され、商業が盛んになって消費社会へと移っている。こうした政治的・経済的状况のもとに、一方で封建的身分制度や徳目が人びとを縛るようになると同時に、京都・大坂・江戸の三都の賑い、「遊廓」・「芝居町」の二大悪所の出現といった社会現象が立ち現れてくることになる。

この時期の文芸には、中世的な表現と非中世的表現、時流に乗りきれぬ者の困惑や怨嗟の声とこの世を楽しむ者の謳歌の声など、様ざまなレベルで混在が見られる。俳諧にしろ、仮名草子にしろ、未成熟で蕪雑な表現がそのまま時代の表現であり、また、魅力となっているのだが、それぞれがそれぞれを十全に表現しうる方法を模索していたのがこの時期の文芸の現実であった。そして、いかなる形にせよ、文芸の作り手が自身の生きる現実世界との接点を見定めようとする姿勢を見せるとき、ほのかにはあるが、近世の表現の方向が見え始めていたと言えよう。

第二部 規範の定立

第二部は元禄時代を頂点とする一七世紀後半から一八世紀前半へかけての約五〇年間の文芸、およびそれを取りまく状況が対象となっている。開幕から一〇〇年たとうとしているこの時期、政治的・経済的な高潮期であった近世初頭の状況にかげりが見えるようになってくる。経済的発達への行き詰まりは物質優先の風潮を鎮静し、幕府支配の強化、諸規制の布告は人びとの精神を鬱屈させた。元禄の社会は必ずしも明るいばかりのものではなかったのである。

近松が社会的な桎梏のなかで意のままにならぬ生を生きる人間に焦点をあて、西鶴が性に向かう心の動きを執拗なまでに追い求め、芭蕉が日常と非日常のあわいに繋ぎとめられている自己の心にこだわったのも、彼らが現実社会と自己とのかわりを見つめ、人間の生き方に真摯な目を向けていたことを示しているといつてよいだろう。いわば彼らは「人情」に深くならずんだのである。元禄時代はこうした精神の動きを時代のものとしていた。儒学や古典学の動向もこのことと切り離して云々することはできない。さらに彼らは、こうした内質を表現するのに独特の文体を作りあげていった。たとえば、それはすばやい転換によって多量の意味機能を可能にする文体であり、また、「雅」と「俗」を二重写しにしたような文体であった。このようにして彼らは、近世的表現総体を確実なものにしていったのである。

第三部 近世表現の可能性